

むかしの杭は朽はてゝ六

英の梅(97)鶯塚声ものときき

雀満(98)寺名高く響く入札の

鐘の音に馳(はま)る桜(99)のみや

むかひの岸にもさき

美智(め)て霞にまかふ花の

雪舟に載せ行たはれ

女(め)か絃歌(げんか)の声は水に

(97) 長柄村田圃の中にあり。昔墳上に古梅あり。六弁の花が咲き、元旦には鶯来たりて春を告ぐと云い伝う。南長柄にあり。天台律宗雲松山慈祥院と号する。本尊は阿弥陀仏。梵鐘は長門の国主毛利侯より寄附されたもの。

(98) 中野村にあり。旧地は野田小橋。いま古大和川の堤、字を桜野という。ゆえに名とする。祭神は天照太神。神木として桜多し。水辺より馬場の堤に至るまで、一帯の桜にして、弥生の盛りには雲と見、雪とうたがう光景なり。西の岸は川崎堤より北へ堀川の口まで、こゝも桜の並木あり。川を狭みて兩岸の花爛漫として水に写し、川風に花の香をのせて四方に漂う。陸を歩み、船にのりて、唄う人あり舞う人ありて、貴賤老若終日遊宴する。ゆえに浪花において花見の勝地最上といはもつともなり。

(99) 長柄村田圃の中にあり。昔墳上に古梅あり。六弁の花が咲き、元旦には鶯来たりて春を告ぐと云い伝う。南長柄にあり。天台律宗雲松山慈祥院と号する。本尊は阿弥陀仏。梵鐘は長門の国主毛利侯より寄附されたもの。



桜宮



湧き群り遊ふ諸人は

舞つをとりつ爰(こゝ)かしこ

葭(よ)簀(ず)のかきにもつとな

らへ大長寺(おほなげ)の鯉墳

網島(あみ)に川魚胎(あま)さく京(きやう)

橋や靈澤深き川崎(かき)の

御宮を近くふし拜み

大江(おほ)の岸は八軒家泊り

(10) 網島にあり。浄土宗川向山と号する。本尊は阿弥陀仏、恵心の作。境内に鯉塚あり。寺内に寛文年間、この地の漁夫淀川にて獲れたる奇妙なる鱗の鯉魚を埋めた鯉塚がある。また、享保五年(一七一九)十月十四日境内で心中した天神筋町紙屋治兵衛と曾根崎新地芸妓紀ノ国屋小春の墓がある。この事件を近松門左衛門が当寺で『心中天網島』として執筆した。当寺の傍に船宇という貨食家の庭中は美観にして眺望絶景なり。

(11) 備前島ノ東にあり。この地は淀川の堤にあり漁家連らなり、鮮魚を多く市に出す。また貨食家は風流の座敷を設け、前には難波津の通船・釣船・網船の逍遙に夏の暑さを忘れさせる。夕暮の河風に螢飛びかうは星の流れるに似て、また中秋の月は銀色三千界の景色なり。東は信貴・生駒・掠が嶺峠・かつらぎ・二子山の雪景色も一望にして、難波最上の名境なるべし。

(12) 徳川時代の公儀橋の一つ。旧大和川・猫間川等合流して橋下より大川に入る。橋の欄干擬宝珠銘に元和九年造立とする。大坂城の北の出入口の京橋は、秀吉の造った京街道の起点にあたり、京都に通ずる橋から名付けられた。この街道は徳川時代を通じて野崎まいりの人々で賑わった。また北の橋詰に川魚市場があり、朝毎に川魚の市が立つ。鯉・鮒・うなぎ・なます・どじょう・すっぽんなど河湖のあらゆる魚を集めた売買の様子賑わしく、すっぽんを以って市の終りとなす。おそく来て市に遅れる者を「すっぽんの間に合わぬ」というたとえあり。

(13) 天満川崎にあり。『国花集』に云う。元和年中(一六一五〜一四)松平忠明下総侯創建。九昌院建国寺と号する。御例祭四月十七日のみ参詣を許される。境内に桜多く弥生の花の頃は殊更に美観勝景なり。

(14) 八軒家より西へ松屋町すじを南へ住吉の傍までを凡て大江の岸といい、波うち際の広々とした所なり。八軒家は舟宿僅に八軒つらなり、京師上下のゆきき、夜の船昼の船出づるあり着くあり。群れ来たる人絶え間なく、賑わしき事類なし。

定めぬ旅枕夢をふし

見に淀かはを夜昼上り

下り舟天神橋の市場<sup>(105)</sup>

にと春の初めは若菜

より雪にほり出す竿

また四時の菜蔬たえ<sup>(き、そ)</sup>

まなし鉾流の神事

には天満宮をむかへむと<sup>(106)</sup>

(105) 天満菜蔬市。天神橋は淀川すじの大川に架かる川上より第二の大橋なり。長さ百二十二間三尺、巾三間。高欄に擬宝珠あり壯観なり。市場は天神橋北詰より竜田町までの浜側通三町ほどの間。問屋四十軒、中買百五十軒という。この市場は、日々朝毎に多く人集まりて菜蔬を商う。売る人、買う人賑わしき事は常にたゆむ事なし。

(106) 鉾流の神事。祭神は大自在天神。天曆三年(九四九)村上天皇の勅願により創建されたと伝える古社。住吉神社とともに大阪の二大神社の一つ。常に詣人多く、境内の市店・観物・植木屋の鉢植・泉水の金魚、月毎の二十五日の群参は昼夜道にあふれる。鉾流しの神事は六月二十五日なり。朝より御迎船として、福島の産子はみやびやかに船を飾り、一様の浴衣を着て、櫓拍子揃えて難波橋に至る。また寺島より船印に吹きぬきを飄し、飾人形、一様のゆかた帷子に太鼓を拍って踊り狂う。神輿は難波橋より船に移し、警固の役船前後に配し、音楽を奏して戎島の御旅所へ渡御ありて、当家の神主盃を頂戴す。これを拜せんとして、数百の楼船川の面に所狭く並び、陸には棧敷を造って幕を引き、金屏風を立てわたり稲麻の如し。誦候屋敷には家々の紋の提灯をてらす。船遊びは三弦をならし、歌の声麗わしく、花炮は星降り昇り竜の如し。水の面は輝き、市中の車・北新地の妓婦のねり物・頓狂言など限りなくありて、大坂第一の賑わいなり。京師の祇園会・浪花の天満祭は聞くよりも見るが百倍なるべし、という。



こゝ星くたり龍も登

るや波の上暑さをよ

くる山崎の洲さきの

水と燕尾(えんび)にわかれ

左も右もすみふね

御(107)霊の宮は太刀弓(ゆみ)

箭武門(や)の尊信いち

しろく西成の大社

(107)

亀井町にあり。円御霊または新御霊とも称する。祭神は天照大神・八幡宮・菟布良媛の二神、源正霊神等を鎮座する。例祭正月十五日の張の神事、同月十七日御弓の神事六月には夏祭御輿渡御など、船場の市中にあり常に参詣の人絶ゆる間なし。



祭日神輿渡

座<sup>(108)</sup>摩の宮みゆきの行粧<sup>(ぎようそう)</sup>

格別に上難波<sup>(みそぎ)</sup>鷓鴣<sup>(せうじ)</sup>帝

楽倫みちに明ならむ

神をいさ迷<sup>(め)</sup>にうつ太鼓

祭々の車<sup>(だん)</sup>楽<sup>(じり)</sup>はちまた

く<sup>(109)</sup>に轟きぬたのむ

心は一筋に御名をとなふる

両<sup>(110)</sup>御堂順慶<sup>(111)</sup>みちの夜

(108) 南渡辺町にあり。祭るところ井神三座、龍神二座、合せて五座という。この御社は難波市街繁華の中なれば、常に参詣の人多く、市店社前に連り、芝居・見世物ありて更に賑わしい。

(109) 上難波宮。上難波にあり。祭るところ仁徳天皇なり。境内に摂社・末社多し。例祭六月二十一日神輿橋通の御旅所に渡御の祭礼には厳重にして、供奉の行粧美観なり。尤もこの辺の市中及び新町の廓中の産土にして、すこぶる賑わし。又御旅所あたりの産土地より、矢倉太鼓など美を尽して飾りし太鼓を数多出せり、これ当社の奇観なり。このほか、摂社末社の神事しばしばあり、もとより浪花の市中なれば、参詣の人多く常に間断なく、且つ、軍書講積、昔噺、茶店料理屋など連らなりて、すこぶる賑わし。

(110) 御堂筋本町の北にあり。表御堂または北御堂ともいう。京師西本願寺抱所なり。本尊阿弥陀仏。常に参詣の老若間断なし、毎年七月十七日より十九日まで、京師本山より灯籠を移して御堂において門徒に見せしむ。これ恒例なり。景勝として市中第一の仏閣なり。難波御堂。御堂すじ久太郎町にあり。裏御堂、また南御堂とも称す。京師東本願寺の抱所なり。本尊阿弥陀仏。中興第十二代教如上人、將軍より台命を蒙りてこの地を賜り、難波御坊と称す。初め文禄年中には道集町一丁目にあり、渡辺御坊といひ慶長の末にこの地に御堂を移され、南北両御堂とも莊嚴艶麗にして他に比類なき勝地なり。

(111) 夕暮より万灯を照らし、さまざまの品を飾り、東は界筋、西は新町橋まで両側に店を連らねる。これを見ようと往きかえりて群をなす。その好みによつて店々集まる。衣服、道具、袋物、櫛、その隣には小桶・杓子・按板、その次には神棚・仏器、その向いは草履・足駄・紙草履、陶器店には今利焼・印部焼・行平鍋、また野菜店には限りなく、五月の頃の早松茸・寒冬の孟宗笋までも並べたてて売る声喧しい。年の暮は尚更賑わしく、まず蓬菜の飾物、穂俵・裏白、片店には新曆・羽子板・門松売り、梅匂う春ともなれば、年玉物のかずかず、臘月、桃の花ほころび、柳桜の弥生の雑店、紙雛・衣裳雛、端午の前には染織、紙幟・八幡太郎・頼光・牛若・金時・旗持ちまで威風凛々と飾りける。夏祭も過ぎ、霊祭の典物、盆の灯籠、重陽には菊の花・万菊・千菊数多し、これらを見んとて新町橋を歩き過ぎて、暁の鐘を聞く人もあり。

の市東横ほり松。屋

まち大江さかの釣鐘は

十二の時を恩澤の音に

撞出してくもりなく

朝日照日の神明の光を

伝ふる玉造豊津の稲荷

梅菜所鵠とふや森の宮

蓮如松も光もり亀井の

(112) 東横堀川は天正十三年(一五八五)惣堀の一部なり。慶長期にできた西横堀川との間には船場がある。元来大坂城三の丸の外堀ともいう。松屋まちは、江戸初期からの町名。大坂三郷南組に属す。上町台地の西の崖下を南北に貫く松屋町すじは近世以来の大阪の商業の地区なり。北の方は豊臣時代の大阪城三の丸の地に、京都伏見から町人を多く移住させて成立。また近世から駄菓子問屋の集中したところなり。

(113) 釣鐘町にあり。寛政十一年(一七九九)將軍大坂へ御入城の時、大坂町人は土産として御上意金を頂く。御恩を忘れない為に鐘を鑄て銘文を刻した。また市中に出火あるときは早鐘にして火事を知らせる。もとよりこの地は丘の上であり、九間余の高樓を設け、浪花の町眼下に見えて絶景なり。

(114) 玉造稲荷町にあり。祭神Ⅱ本社上の社倉稲魂神・下照姫命、中の社稚日尊女月讀尊、下の社軻遇突智命の五座を合祀する。寛政の頃当社地に砂持という珍なる事が繁昌した。是は東横堀川の砂浚したものを真田山の傍に積まれた砂を、氏子の町人が当社を清浄するに運ばれたるものなりしが、しだいに賑わしくなり、上町よりも大勢出向いて、又船場、嶋の内そのほか市中色里よりも老若男女の差別なく打ち連れて運ぶ程に、終には浪花中はいうに及ばず五里千里の遠くより群参して砂を運ぶは不思議な光景なり。

(115) 玉造森宮村にあり。鵠森という。祭神Ⅱ用明天皇。蓮如祈松Ⅰ蓮如上人この松の下に座して、当社の神ならびに上宮太子に、一宗海内に弘通し信心の門徒繁昌を祈られたという。亀井の水は本社東の入湯沐浴にあり。亀井の水を汲みて常に諸人を入湯させる。万病に平癒するといふ。ゆえに男女に限らず病苦の者ここに来て入湯す。

水に浴みして洗ひて向ふ

旭菴(朝日庵)みたま威(い)猛(もう)し清正

公猫(猫)間のかはに影みえて

色なる波と萩の花かた

ふくけふの日もすき山(山)や

歩むに広き番馬より

さき見上るしゃちほこの

金城(19)堅く治れは御代の

(116) 森の宮の南、猫間川の傍にあり。日蓮宗の庵。本堂に清正公を祀る。当庵は旧來此地にあって妙見尊を安置し鎮守稱荷社あり。然るに天保九年(一八三八)猫間川御凌の時、浪華十二薬師第一番の薬師堂をここに移して仏殿を建宮する。薬師如来の像(行基菩薩作)は初め堀江御池通にあり。清正公の神像も同年肥後国より勧請したという。いずれも靈驗あらたなる故参詣の人常に間断なし。

(117) 金城の東にあり。平野川と合流して鴨野橋の下を流る。天保八、九年(一八三七・三八)御仁恵により川幅を広くし、底深く浚えられて船の往来甚だ便宜なり。この流れに橋を架け、川の西岸一帯に草花を植えるに、玉造の花圃という。春は高麗菊・仙台秋・金錢花・牡丹、夏は石竹・美人草・百合・夏菊、秋は菊・女郎花、冬は水仙・寒菊まで、色鮮やかに咲き乱れる花に絶間なく常にこの辺一円は錦繡の褥をしくが如く眺望ことに美景にして浪花の一奇観という。

(118) 森の宮の上の方にあり。杉の大樹の繁る山。四方の眺望殊更に風景よく、春暖の頃は浪華の貴賤ここに来て遊宴する。

(119) 京橋の南方にあり。『撰陽群談』に云う「金城は東生郡大坂玉造の岸にあり、云々。金は七宝の初。土中に朽ちず、火も焼くことは能はず。よつてもつて世俗金城と祝し奉る」という。城外の番場広々として、風景殊更に美観なり。二月初午の日をはじめ、空うららかに雲雀さえずり、若草の萌え出る頃は市中の貴賤老若群参し、芝原に筵をのべ、所せましと遊宴し観樂すること日毎にして、その賑わえること偏に太平の御恩沢というべし。



恵みに富潤ふ浪華の

さとこそ久しけれ

琴橋漁人徽書

印

印



京橋

此帖は童蒙(どうもう)の爲とて撰津名所図会によりて先考の作られたるなり然れともかの図会中の録する所先哲の正説をのみ記載せしとも見えす恐くは後世好事家の牽強(けんきやう)附会も多しと見ゆれと強く穿鑿(せんさく)に及はず唯探勝の途中あなち実地を踏さるも其処(そこ)より近き処なれと皆筆にまかせて句調の齟齬(そご)なき事をのみはとさられた

るなれば正説を立て議論に係りるものには非ず畢(ひつ)竟(きやう)と童蒙の一読して直に闕(ひやう)解(かい)しあかしむ事先考の意なりかくて彫刻(ていこく)未(いま)来(きた)さりし間に先考病に罹(かか)りて竟渡(おわり)せられたり故に残其顛末を註し且その麓編(そ)を陳すと云

嘉永二年十一月 男 香川昶識

鳥文堂蔵版 印

執筆者紹介（執筆順）

瀧澤 秀樹 大阪商業大学経済学部教授  
大阪商業大学商業史博物館館長

井伊 正弘 元彦根城博物館館長

宇野 茂樹 元大阪商業大学教授

上田 正昭 京都大学名誉教授

高橋 哲雄 大阪商業大学経済学部教授

石上 敏 大阪商業大学経済学部助教授

田崎 公司 大阪商業大学経済学部講師

小田 忠 大阪商業大学商業史博物館学芸員

池田 治司 大阪商業大学商業史博物館学芸員

黒木 樹 大阪商業大学商業史博物館学芸員

運営委員

矢野 恵二 大阪商業大学経済学部教授

石上 敏 大阪商業大学経済学部助教授

編集後記

▼本誌は、本学商業史博物館が平成一二年六月に博物館相当施設の指定を受け正式に博物館として発足したことに伴い、調査・研究・広報の拡充を図ることを目的として創刊されたものです。創刊号に相応しい論文をご寄稿頂いた先生方には厚くお礼申しあげます。

▼昨年九月の学園の組織変更により比較地域研究所に移り、本誌の編集に携ることになりました。「博物館行き」という言葉がありますが、私はいよいよ「博物館行き」かと思っていましたら、どうしてどうして、最近の博物館は昔と随分違って「ハズ・オン」という言葉に象徴されるように、今や「博物館がもしろい」時代になりつつあることに、遅ればせながら気づきはじめた次第です。

▼創刊号にそのおもしろさが出ているかどうかは、読者の判断に委ねるしかありませんが、井伊先生と宇野先生のユニークな対談は如何でしたでしょうか。執筆者、内容とも本学ならではの特徴が出ておりましたら幸いです。第二号も比較地域研究所と連携を図りながら、一層おもしろいものを目指して鋭意努力致したいと思います。

（後藤郁夫）

大阪商業大学商業史博物館紀要 創刊号

平成一三年三月二〇日発行

編集・発行 大阪商業大学商業史博物館

〒577-8505 東大阪市御厨栄町四一―一〇  
☎〇六（六七八五）六一三九

印刷・製本 株式会社トープ

〒591-8032 堺市百舌鳥梅町一―一八一―二  
☎〇七二二（五七）五七八五